

フィンランドの地域精神保健福祉活動(1) : 精神医療の現況

著者	守村 洋
雑誌名	人間福祉研究
巻	7
ページ	203-209
発行年	2004-03-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00000405/

フィンランドの地域精神保健福祉活動(1) — 精神医療の現況 —

守 村 洋*

要 旨

これは2003年8月にフィンランドの地域精神保健福祉活動を調査視察した報告である。精神医療の現況として Kellokoski 精神病院, Järvenpää 市営デイケアを調査視察した。こころの病いに対しては, こころのゆとりが必要なことを再認識した。

I はじめに

我邦十何萬ノ精神病者ハ実ニ此病氣ヲ受ケタルノ不幸ノ外ニ, 此邦ニ生マレタルノ不幸ヲ重ヌルモノト云フベシ

この言葉は約100年前に提言された呉の「二重の不幸」である。つまり精神病になってしまった不幸と日本という国に生まれてことの二重の不幸である。現に今の時代でさえも, この「二重の不幸」を払拭することはできていない。

筆者は平成15年度北海道浅井学園大学学術フロンティア研究費の助成を受け, 2003年8月にフィンランドの精神医療の現況を調査視察する機会を得た。スウェーデン, ノルウェイ, フィンランドなどを含む北欧諸国は, 伝統的に培わされた社会保障制度をもつ「福祉国家」として名高い。これらの諸国の精神保健福祉活動を明らかにすることは, 我が国における「二重の不幸」を打破する手がかりと

して意義深いものと推測される。

本稿では, フィンランドにおける精神医療の現況として, 精神病院, デイケアを紹介する。

II Kellokoski (ケッロコスキ) 精神病院



Kellokoski (ケッロコスキ) 精神病院

最初に首都ヘルシンキから40キロ程郊外に位置する Kellokoski 精神病院を調査視察した。

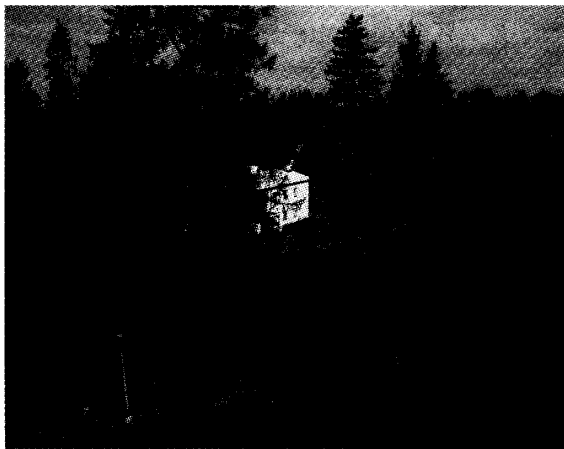
*北海道浅井学園大学人間福祉学部生活福祉学科

キーワード：フィンランド, 地域精神保健福祉活動, 精神医療体制

1. 概要

1700年代に建てられた貴族の屋敷を1915年に国が買い取って入院ケアを開始した。1970年代はベッド数1,000床を有していたが、VALTAVA 改革^{註)}以後の社会サービスの開発はめざましく、施設中心のケアからオープンケア中心のサービスへの政策的な構造転換が行われ、現在は17病棟269床となっている。入院病棟、デイケア病棟、デイ・リハビリ病棟、作業療法病棟（入院・外来）等のほか3～5名の入所可能なリハビリホームをもっている。入院患者は1933年生まれの70歳から1970年生まれの33歳と年齢の幅は広く、男女比は同じである。

歴史がある貴族の屋敷らしく、広大な敷地には森林や池といった自然が豊富であった。



管理棟2階テラスから見た敷地内

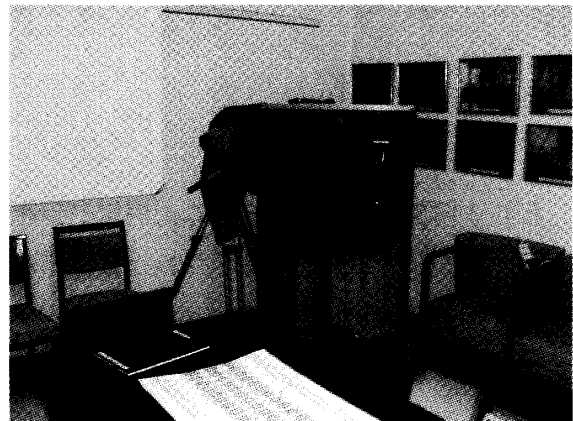
2. スタッフ体制

Kellokoski 精神病院のスタッフは総勢500名（オープンケア100名、病院400名）となっており、職種として精神科医、心理士、ソーシャルワーカー、ナース、精神保健福祉士、作業療法士、リハビリテーション・ワーカー、秘書などが働いている。

1) 医師

精神科医体制として院長3名がいて、その下に3名のドクター、さらに10名の若い医師がいる。主として薬物療法と各種セラピーを行っている。

広いフィンランド国内における遠隔地との情報交換をするため、時にはケーブルビデオを用いたカンファレンスを行うこともある。これにより地域の精神医療を向上させている。



遠隔ビデオカンファレンス室

前院長の方針で病院内には患者が作った作品が多く飾られている。特にアートに関しては力を入れており、スカンジナビア諸国及び近隣諸国から若いアーティストを呼び込み、彼らが作ったモニュメントが敷地内の至る所に展示してあった。



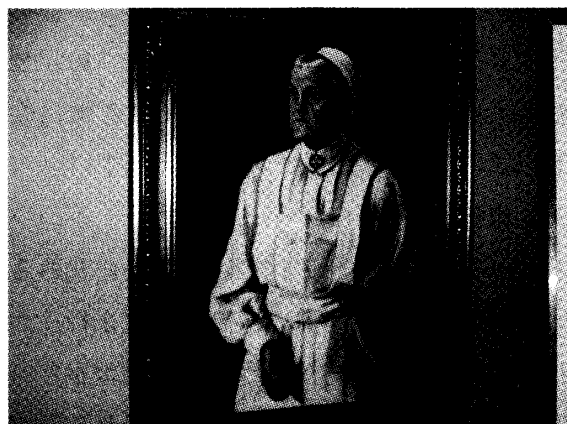
病院内廊下



敷地内のモニュメント（作成中）

2) 看護

アンナパカレン看護長という伝説の看護スタッフを語らずにはいられない。彼女は1933年から1955年に渡り献身的な看護を提供し続けた。例として暖かいスープが冷めないように食器を暖かいものに変えるなど、常に患者のことを考えてケアを提供し続けた。丁度、フィンランド版「ナイチンゲール」と言えよう。



アンナパカレン看護長

現在、彼女の意志を引き継いで次のような看護方針が掲げられている。

患者第一主義
根拠に基づいた活動
継続教育

信頼と雰囲気
環境と文化
国際的ふれあい

実際、1人の患者に対して1週に3回看護のレポートを作成することが求められている。そのためには患者に直接話を聞く時間が必要である。必然的に患者との関係も深まり、より質の高い看護を提供できることにつながっている。

3) セラピスト

この病院では数名のセラピストが働いていた。

①芸術療法



患者の作品

案内していただいた芸術療法部では患者の作品が所狭しと並んでいた。このような作品を製作するだけでなく、年に一回病院の外部で展示会を行っている。それほど大げさなものではなく、額縁に収め作者を明記した上で展示し、そして作品の写真集を発行する。作品には額縁をつけることによって、より作品に重みを持たせることができるのである。

展示会を通じての常時接している人以外との触れ合いは、多少なりとも緊張を伴うが、

逆にそのことにより自分たちの自信へとつながっていく。自信を得た人の中には独自で個展を開く人もいるという。また治療という枠を越え、施設を離れて在宅になっても継続している人もいる。

②音楽療法



音楽療法

この音楽療法部では、打楽器・弦楽器などを奏することで音楽を通じて自己表現をしている。現在、フィンランド国内で音楽セラピストは約50人が登録している。精神科の領域ではその半分の25名が働き音楽療法を担当している。

③園芸療法



園芸療法

園芸セラピストは病院に唯一一人のみ働いており、7名の庭師を含めて8名のスタッフ

で組織されている。非常に人気の高い療法であり希望者が多く、40人の登録メンバーが活動している。それだけのメンバーのニーズに応えられるのは、広大な敷地を有していることと豊富なプログラムが準備されているからである。現在、70種類の野菜や花などの園芸を行っている。実際、視察調査の際には我々の足も棒になるほど歩き回ったことが印象的である。

以上のように絵画だけではなく音楽や動きに焦点を当ててのセラピーが行われている。各セラピストは精神専門看護師にセラピストの資格を有しているスタッフである。彼らセラピスト達が大切にしていることは、病院から抜け出せるための「表現」としてアートを行っているということである。

Ⅲ Järvenpää (ヤルヴェンパー) 市営デイケア

次に Kellokoski 精神病院から車で10分程離れた Järvenpää 市営デイケアを調査視察した。

1. 概要

Järvenpää 市営デイケアは精神科病院あるいは外来から紹介される。デイケアを行うか否かの判断は、在宅生活が送れるか否かということである。つまり在宅生活を送れる人がデイケアサービスを活用でき、在宅生活を送られない人が入院する。

2. スタッフ体制

デイケアには2名の精神科専門看護師、1名の作業療法士、病院と兼務の精神科医および臨床心理士、事務員で構成されている。他

にも職種として精神介護士がいるが、将来的には作業療法士や看護師等の有資格者で構成したいとのことである。

3. プログラム

8時から15時半までの開所時間内に木工、料理などの作業がプログラムされている。その時間外は市のホームヘルプサービス、デリバリーサービス等を活用している。基本的にはグループで活動し、ケア計画を立案する。実際かなりやる気がある人たちが活動している。活動のアセスメントは2週間から半年の間で行う。



デイケア（ビリヤード）



デイケア（木工作業）

初回評価は2週間目に行う。2週間でケアプランを作成し、どのグループに所属するか決定する。ケアは無料であるが、食費として

7ユーロ必要である。

地域へ赴くことは多々あり、日帰り旅行は多い。また、年に1回は泊まりがけで10日間ラップランドへ行く（90ユーロ）こともある。これらに参加することで彼らによっては非常に大きな自信が生まれる。これらの研修費として年に約500万円予算を計上している。

また、デイケアでは家族と非常に密接に情報を交換している。入院が必要な人にとっては好都合である。デイケアで入院に至るまでの心の整理をしている場合もある。

Ⅳ おわりに

精神医療の歴史、国の文化などから単純に比較することはできないが、いずれの精神保健福祉活動も現在の我が国の現状とは、かなりかけ離れたものとなっている。かつて精神病院内で患者のためにと必死にケアしていたことを自問自答している自分に気付いた。人をケアするのは人である。もちろんマンパワーも必要であるが、やはり「こころ」であろう。そのこころを育むのは「表現」されたアートであり、気持ちのゆとりであろう。

冒頭で掲げた「二重の不幸」を払拭するには、今の日本より進んでいる地域や体制を積極的に導入し、精神の病いを患ったとしても少しでも人としての生き方を提供できるよう体制づくりをしていく必要があるだろう。

註) VALTAVA は valtionapujen tasauksen vaikutukset (国庫支出金の是正の影響) の略語。国庫支出金に関する改革であるが、その目標に補完する社会福祉法と合わせて1984年の改革の総称とされる。(山田真知子；フィンランド福祉国家における社

会サービスと高齢者政策(5) 北大法学論
集,第53巻第6号:1713-1773,2003より)

参考文献

呉秀三;精神病者私宅監置ノ状況及び其統計
的觀察, 1918

横式多美子;精神病院への要望, 精神看護,
Vol.2 No.1, 1999

伊藤弘人;各国の精神保健医療 北欧(新福
尚隆, 浅井邦彦編)世界の精神保健医療現
状理解と今後の展開, へるす出版, 2001

Community Mental Health Welfare Services in Finland (1)
– An examination of present mental medical conditions –

Hiroshi MORIMURA

ABSTRACT

This paper reports on a research tour to community mental health welfare services in Finland in August of 2003. In order to identify present mental medical conditions, we examined the Kellokoski Mental Hospital and the Järvenpää City Day – Care. We recognized again the need for a more leisurely approach in issues relating to mental health.

Key words : Finland, community mental health welfare service, mental medical care system